恋色

蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋色

【Ｎコード】
Ｎ６７６２Ｍ

【作者名】
蓮

【あらすじ】
ある恋の話。

人から初めて告白された心音。おかげで人を好きになるということを知る。

心音にとって好きな人とは…

人物紹介

中学3年2組
関川心音（せきかわここね）
　菱田悠介、純奈といとこ。
　いとこだということを知られたくない。だから、いとこだということは誰も知らない。

鈴村桃香（すずむらももか）
菱田悠介（ひしだゆうすけ）
　関川心音、愛梨といとこ。
　いとこだということを別に知られてもいい。

長谷川翔（はせがわしょう）
田中雅人（たなかまさと）

中学2
河合晴海（かわいはるみ）

中学1
関川愛梨（せきかわあいり）
　関川心音の妹
　姉、心音が悠介といとこだということ、隠していることを知らない。

菱田純奈（ひしだじゅんな）

菱田悠介の姉　２０歳

高校卒業後、就職（デザイン関係）

中学3年　春

桜が散っている。

そう、今は4月。

どきどきしながら登校しているところ。

学校に着いたときには玄関に人がたくさん。

なぜなら、新しいクラス名簿が張り出されているから。

うしろから「心音―おはよー」

この声は桃香。大事な親友。

私は中学1年の時、桃香のクラスに転校してきた。

人見知りな私は、なかなか人に話しかけられず…。

そんな時、「おはよ」と　桃香に声をかけられた。

それからクラスに馴染んでいった。

2年も桃香と同じクラスだった。

だから、3年も…同じクラスに…。ふたりの願いだった。

「どきどきするね。」　「うん。」

心臓がバクバクだった。

たくさんの人をかき分けてクラス名簿を見る。

――3年2組　　25番鈴村桃香　26番関川心音――――

「キャーー」
「やったねーまじ、運命」

3年間も同じクラスになれるなんて…
神様、ありがとう。

――――こうして新しい1年間が始まった。

運命の席決め

３年になってから１週間たった５時間目。
とうとうきた。
運命の席決め。一応、今は出席番号順に座ってる。

私のクラスは

４、５人グループ。
男女二人ずつ、または３人と２人。
何か問題がない限り、１年間同じグループ。

だからこそ　席、グループは重要！

そこで桃香と決めたこと。
・ふたりは同じグループになる・席の場所は後ろ
・桃香がグループ長になる

この１時間で全部決めてしまう。
隣の教室で先生と学級委員、各グループ長で考える。
だから、桃香には頑張ってほしい。

先生たちがいなくなって教室に残っている人たちは自習。

「関川―また同じクラスだな。よろしく。」

声をかけてきたのは隣の田中雅人。

去年、グループは違ったけど、席が近かったからたまに話した。

田中くんはみんなを笑わせる存在。

「こっちこそよろしくね。田中くんは誰とグループになりたい？」

「べつにないなぁ。たのしけりゃ　それでいいし。もし、暗い人ばかりだったら俺が明るくしてやるよ！」

「頑張るねーていうか…」

「うん？」

「こ、声、でかい。シーッ」

みんなの目線がふたりに集中していた。

それからふたりとも静かに自習。

運命の席決め２

自習をし始めてから３０分くらいたって
隣の教室から先生たちが戻ってきた。

さっそく、学級委員がそれぞれのグループを発表し始めた。
先に名前を呼ばれた子たちは、喜んでいたり、ちょっと残念がっていたり…

そして桃香のグループ。
「鈴村さんのグループは…
田中雅人くん、菱田悠介くん、僕、長谷川翔、そして関川心音さんです。」

やった――！

桃香の方を見ると、先生にバレないようにピースサインをしていた。
私も桃香にピースをする。
そこに、何故か田中くんもピース。

あとで、桃香にお礼　言わなきゃ。
けっこう、いいグループだし。楽しくなりそう。

でも……。

運命の席決め３

菱田悠介。

同じグループだ。少しドキッとした。

だって…。菱田悠介と私はいとこだからだ。学校で知っている人はいない。親友の桃香にだって言っていない。

小さい頃は、車で１時間かけて菱田家でよく遊びに行った。

でも、転校してきた今は１０分歩けば、家に着く。

小学生になってからは遊ばなくなって

こっちに来てからも挨拶ぐらいだけで、コレといった会話はしていない。

１、２年のときは違うクラスだったし…。

―――小さい頃を思い出す。

手をつないで遊んでいる風景。

具体的には覚えていないけど…。

運命の席決め４

楽しくなりそうな１年が始まった。

私の隣は学級委員の長谷川翔くん。
前に桃香。となりに悠介。
その前に田中くん。田中くんの隣はうちらのグループの前のグループの子（男子）。

ちなみに私の席は窓側で１番うしろ。

隣の長谷川くんと桃香とＴＶの話をしたり、勉強教えてもらったりして授業中ずっと喋ってる。

斜め前の悠介とは３人の会話にたまに入ってくる時もあるけど、基本は前の田中くんと話してる。

毎日、楽しい！って思える。
それくらいこのグループは仲がいい。

懐かしいあの頃

それから日にちは経ってグループの仲はますます仲良くなった。

今日は平日。なのに家にいる私。

「風邪かしら？熱、計った？」

「うん。３７，８度ある。やっぱ風邪かなぁ。」

「今日、お母さん忙しいから、病院行けないんだ。」

「いいよ。自力で直すから。」

「ごめんね。でも、元気そうじゃん。１日寝れば治りそうだね。」

「うん。寝てるよ。」

「じゃあ　お留守番頼むわね。いってきます。」

「いってらっしゃい。」

玄関でお母さんを笑顔で送る。

私のお母さんは毎日、仕事で大変。

仕事熱心な両親はだんだんすれ違って離婚してしまった。お父さん

とお母さんの仲が悪いという訳ではなく、それぞれがやりたいことがあって目標があって離婚という結果になってしまった。

少しの間、その家で母と私と妹で住んでいた。
でも、お母さんは仕事で夜遅くなったりした時、子供2人じゃ危ないからと言って母の姉、つまり悠介の母親の家の近くのマンションに引っ越すと決めた。

引っ越してきたから中1の時、私は桃香たちのいる、この学校に転校して来た。

その日、1日中ずっと寝ていた。
こんなに寝れるんだと私自身びっくりした。

日が沈むころ　玄関のチャイムが鳴った。

体を起こし、急いで玄関に向かう。

お母さんかな。

「お母さん?」と言うのと同時にドアを開ける。

でも、そこに立っていたのは悠介だった。

「はい。明日の予定。」

紙を渡される。

「あ、ありがとう。」

「ていうか俺はお母さんじゃないからな。家が近いからって言われて持ってきた。熱でもあんの？」

「朝あったけど、今は平気。１日中すっと寝てたから。」

「だから、そんなに髪ボサボサなんだ。」

「う、うるさい…／／／」

すると

「あらー悠ちゃんじゃない。また背伸びたんじゃない。あっせっかくだから夕飯でも食べていったら？」

と、うしろからお母さんの声がした。いきなり声がしたと思ったら何を言ってるんだ、この人は。

「お母さん！」

「いいじゃない。悠ちゃん、お母さんに言っとくから。」

無理矢理な感じだけど、悠介と夕飯を食べることになった。

「できるまで心音の部屋で待ってて。できたら呼ぶから。」

「はいはい。悠ちゃん部屋、こっち。」

自分の部屋に悠介を案内する。

「結構部屋、きれいなんだな。」

「まあね。」

「ていうか、お前まで悠ちゃんかよ。」

「いいじゃん。親戚の人はみんな悠ちゃんって呼んでるわけだし…。学校じゃあ悠ちゃんなんて言えないから菱田くんって言ってるけど…。」

「はぁー。まぁいっか。」

そうため息をついた悠介は本棚にあるマンガを取って読み始めた。

私も一緒になって読み始める。

数分たって悠介の口がまた開く。

「久しぶりだな。喋るの。」

「え　私と？」

「そう。ふたりで喋るの小さい時以来じゃない？」

「そういえばそうだね。昔はよく遊んだよね。」

「うんうん。関川、帰る時間になったらめちゃくちゃ泣いてたもんな。」

「あれ、そうだっけ？」

「そうだっけっじゃねーよ。」

昔のころを思い出し、ふたりは笑った。

と、そこに「ご飯出来たわよー。」

「はーい」と返事をしてふたりはリビングに向かう。

するとそこには妹の愛梨がいた。

「悠にぃじゃん。久しぶり！」

「おっ愛梨ちゃん、お邪魔してます。」

何だこれ。2歳年下に馴れ馴れしく言われ、それに対して悠介は敬語。

「仕事が忙しくてなかなか親戚の方に会いに行けなくて…ここにきて1年以上たってるのに悠ちゃんのところにも顔出してないわ。」

「そういえばそうだね。」

「仕事が少し落ち着いたら悠ちゃんのところや他の親戚の方に会いに行きましょうね。」

それから話は変わり、学校の事やらなんやら…。

「ご馳走様でした。もう時間だし帰りますね。おばさん。」

と、悠介が席を立つ。

「あらそう？もっとゆっくりしていけばいいのに。」

「いえ、大丈夫です。おばさんこそ、仕事で疲れていらっしゃると思うので。」

「悠ちゃんは優しいのね。私たちはなんとか生活出来てるってお母さんに伝えておいてくれる？」

「はい、今日はありがとうございました。では。」

部屋から出ていく悠介。

「心音、送ってあげなさい？」

「えっ。」

嫌そうな顔をすると、お母さんは睨んできた。

ため息をついて席を立ち、玄関に向かう。

向かうとドアに手を掛け、もう出て行こうとしている悠介がいた。

「ん？どうした？」

「お母さんが送って行けって。」

「別にいいよ。それに風邪だったんだろ？」

「だよね。でも、ひとりで大丈夫？」

「すぐそこだし大丈夫だってば。じゃあ、、、また学校でな。」

「うん。またね。」

悠介の後ろ姿。

小さいころに比べ、やはり大きくなっているけど

懐かしい。

音楽室

―――次の日。元気になった私は学校に行った。

「おはよー。心音―会いたかったよー。」
桃香と抱き合う。

キャーキャー言ってたら

「おはよー。ていうか何やってんの？」
と、変な目で見てくる田中くんがいた。

そして後ろには長谷川くんがいた。

「おはよー。おっ関川さん、もう大丈夫なの？無理すんなよ？」

「やっぱ長谷川くんは優しいよねー。ねっ心音っ。田中くんとは違って。」

「何だよ。なんか悪いのかよ。」
いつの間にか桃香と田中くんはこんな感じで言い合いをするほど、仲良くなっていた。

キーンコーンカーンコーン
朝のチャイムが鳴り終わろうとしたとき、時間ギリギリに悠介はやってきた。

「おせーぞ、ゆーすけ。時間ギリギリじゃん。」

「寝坊、寝坊！」

「ゆう…じゃなくて菱田くん、昨日はありがと。」

「ああいいよ、別に。夕食、ご馳走になったし。」

———それから午前中はなんとなーく過ごし　昼からの5時間目は音楽。

それも鑑賞の授業。

昼に鑑賞って…眠い……。

桃香に何回も体を揺らされながら、配られたプリントに音楽の感想を書いていった。

キーンコーンカーンコーン。

「起立、礼。」

「ありがとうございました。」

「心音―寝すぎだよ。あたし、何回起こしたと思う？」
呆れた顔で聞いてきた。

「ごめんごめん。睡魔には勝てないよ。」

音楽室を出て教室に向かう。

「もぉ―。実はさぁ先生、ちらちら心音のほう見てたよ。怒ってんじゃない！？」

「マジで！？それはやばいよ。音楽の成績、悪いのに、これ以上悪くなったら……。」

「ふふっ。」

「ん？今、笑った？」

「うん、笑った。（ニヤニヤ）」

「??」

「じょーだんだよ！先生、こっち見てなかったし。ていうか先生も寝てたし。」

「もーもーかー」
からかわれるのが大っきらい。

「ごめんてーでも、次は寝ないでよ。」

「もう寝ないです。……あ゛あ゛！」

「な、何？どうしたの？」

「教科書、音楽室に忘れた！取ってくる。」

「全く…先、行ってるからね。」

「はーーい。」言いながら、音楽室に向かって走る。

もー最悪。寝ちゃうし、からかわれるし、忘れ物はするし…。風邪、まだ治ってないのかなぁ。

音楽室に着き、教科書を探す。

「あったぁ。」ホッとして笑顔になる。早く戻らなきゃ。

帰ろうとしてドアのほうに目をやると、

そこには教室に戻ってるはずの長谷川くんがいた。

「どうしたの？」

「……」無言。

なんだろう…？？

ていうかもうチャイム鳴っちゃう。早く戻らなきゃ。

ドアのほうに向かった。

そして長谷川くんを抜いて帰ろうとした時、

ギュッ。

えっ。

私は長谷川くんに腕を引っ張られ、顔を上げるとすぐ目の前に相手の顔があった。

かっこいい……なんて思ってる時間はなく、すぐに目をそらした。

この状況で目なんて合わせられない。

心臓がバクバク言ってる。

「関川さん？大丈夫？」

「う、うん。」

嘘ついた。異性の人がこんなに近くにいる経験がない私は大丈夫なわけなかった。

「僕の話、聞いて？」

私は小さく頷く。

「僕、関川さんのことが好き…です。」

「えっ。」

驚きが隠せない。いつも普通に喋っている，友達，としか思っていなかったから。

「昨日、学校休んだじゃん？隣の席に関川さんがいなくて、なんか寂しかったんだ。それに1年の時、転校生としてココにやってきて実はそん時から気になってた。だけど、1、2年の時同じクラスじゃなかったし、僕のことなんか知らねーよなぁって思ってた。」

それだけ言いきると、長谷川くんは静かに深呼吸をして

「僕と付き合ってくれませんか？」

と優しい声で言った。

ドキドキしてパニクって声がでない。それよりもこの場から去りたい。

「せき、かわ、さん？」

長谷川くんはずっと無言でいる私を心配そうに見ていた。

私はとっさに

「ごめん。」

と、言って長谷川くんの手を離して音楽室から走り出した。

音楽室2

音楽室から教室に戻る僕、長谷川翔。

「ごめん」って言われた後、「保健室にいるって言っといて」と言われた。

ごめん・・・かぁ・・・。
理由が聞きたかった。
でも、聞かなかった。追わなかった。
何言われるか怖かったからか？

教室に戻ると桃香が心音のことを聞いてきた。僕は言われたことをそのまま伝えた。

６時間目は国語。

先生の声も周りの声も何も聞こえなかった。

◇◇◇◇◇

音楽室から逃げるように走り出した私。

保健室に来たけど、先生も誰もいない。椅子に座り、机に頭を伏せ、目を瞑った。

どうしよう。まだドキドキしてる・・・。人から告白されたなんて人生初だし。

窓から入ってくる風が程良くて気持ちいい。その気持ちよさでいつの間にか寝ていた。

そういえば6時間目、サボっちゃった。桃香に怒られそう。

保健室

――――――「・・・好きです・・・付き合って下さい・・・」

ハッと夢から目が覚める。夢の中でまた同じ人から同じ言葉をかけられていた。その人の顔は見えなかったけど、カーテンが風によって揺れていて春の暖かい日差しが音楽室を暖かくしていた。

さっき起きた現実と今見た夢は全く同じ。漂う雰囲気さえも。

「心音ー大丈夫？」

いつの間にか6時間目は終わっていたらしく、桃香が尋ねてきた。

「うん。大丈夫だよ？」

「えーー嘘ついてるでしょ。」

「何が？」

「6時間目、長谷川くんの様子おかしかったし、心音がココにいることを長谷川くんは知っていたわけで・・・やっぱ何かあったでしょ？」

騙しとおせない。桃香は真面目な、いや、少し怒った顔をしていたからだ。

もし、騙しとおしても自分ひとりじゃ何も出来ないから、いつかきっと桃香に言うだろう。
そう思って私は口を開いた。

「・・・音楽室に教科書、取りに行ったじゃん？それで帰ろうとしたら長谷川くんがいて・・・」

「で？？・・・もしかして」

「うん。好きですって言われた。」

「ええー。本当に！？でも、長谷川くんもそんなに風に心音のこと想ってたなんて・・・」

さっきまで少し怒った顔をしていた桃香はニヤニヤしている。

「で、返事したの？私も好きですって。」

「はあ！？何言ってるの？そんなこと言えるわけないでしょ！」
私は顔が真っ赤になって熱が上がっているのに気づいた。それに気づいたのは私だけではなかった。

「心音ー顔、真っ赤だよ！可愛いー。・・・じゃあ、なんて言ったの？」

「・・・ごめんって言って逃げちゃった。・・・こんなこと初めてでなんて返せばいいか分らなくてパニくっちゃって・・・」

「そっか・・・」

桃香の顔はニヤニヤから少し怒った真面目の顔に戻っていた。
「長谷川くんにもう1度話してみる？ていうか、長谷川くんのことどう思ってるの？」

えっ？そういえば長谷川くんのことどう思っているかなんて考えていなかった。

「友だち？だよ。」

「男の子として好きっていうのは？」

「・・・・・・分んない。」

「でも、もう1度長谷川くんと話すん・・・だよ？」

「分かった。」私は小さく頷いた。

土曜日

今日は土曜日。
私は鏡の前に立って服を選ぶ。なぜなら――――――

◇◇◇◇◇
昨日の給食の時間。
いきなり田中くんが言い出した。
「なぁ、明日どっか行かない？5人でさぁ」

しーん。

「空気読んでよ。知ってるでしょ」と、桃香は怒ってる。

「知ってるよ。翔と関川さんのことだろ？」

「だったら―」

「だってあれからなんか暗くない？だから、ぱぁ―と遊ぶ！駄目？」

しーん。2度目の沈黙。

しかし、この沈黙を破ったのは意外にも長谷川くんだった。
「僕は行きたい。なっ雅人」

「ほらぁ～翔がいいって言ってるんだ、行こうぜ」
半ば、強引だけど行くことになった。

桃香はそのあと、ブツブツ言ってたけど。
悠介は……どう思ってるのかなぁ。

◇◇◇◇◇

駅に待ち合わせ。来たけど、まだ誰も来てないみたい。

「心音っおはよっ」

「も、桃香」

「どうした？考え事？」

「えっ何も考えてないよ」

「ふーん。」

桃香はニヤニヤしてる・・・。
あの音楽室の出来事から長谷川くんとまともな会話はしていない。

なんで長谷川くんはみんなで出かけるのをＯＫしなのかよく分らない。桃香や田中くん、悠介に気つかってんのかな。

それから１０分して男子３人がやってきた。

「おはよう。みなさん。じゃあ、さっそく行こっ」と、田中くん。

男子が前で私と桃香が後ろで歩き出す。

「心音？どこ行く？ゲーセンでいい？・・・・・・おーい、心音聞いてんの？」

「・・・ああ、ごめんごめん。で何？」

「心音、長谷川くんのことずっと見てるけど、好きになっちゃった？」

また、桃香はニヤニヤしてる・・・。

「んなっわけないでしょ」

「あっそう」

桃香に言われて気づいたけど、見てた。おしゃれだなぁって、長谷川くんも田中くんもそれに悠介も。

小さい頃遊んでた時、悠介はちょっと大きめの服を着ていておしゃれっていうのはなかった。初めて見たかも・・・悠介の私服。

土曜日2

何分間か歩いたところでお店についた。そしてボーリング場に向かう。
ボーリングはさっき男子の間で決まったらしい。

「心音大丈夫なの？」

「えっボーリング、苦手なんだよね。ピンに当たらないかも」

「じゃなくて！長谷川くんのこと」

「へ？」

「へ？っじゃなくて気まずくない？」

「うん、気まずいけど・・・でも今日、返事する。ごめんって」

「本当にそれでいいの？長谷川くんってけっこうモテるし・・・今は好きじゃないかもしれない。けど、これから好きになるかもしれないだよ」

・・・うん？もしかして

「桃香さぁ私と長谷川くん、くっついて欲しいとか思ってない？」

「まぁそれもあるけど・・・」

「ニヤニヤしてる」

はぁ桃香は何考えてんだろう。私の気持ちなんて何も知らないくせに。

「じょーだんだよ！私は心音の味方だからね。ほら、ボーリングやるよ。心音には負けないから」

たぶん、私負けると思います・・・。今まででスコア、７０なんて越えてことがない。ピンにボールが当たらないんだもん。

靴を履いたりして準備をしていると

「提案があるんですけど」

「何？田中くんの事だからつまんないことでしょ」

「つまんないかは分からないけど、このあとの行動は2人と3人に分かれる。で、そのメンバーを今からボーリングで決める。」

他の４人は黙って話を聞いていた。

「1ゲームやってスコアの何位と何位が2人でその他、3人でっていう感じ。何位ていうのはくじで決めるから。・・・どう？」

「いいね～やろっ」

「つまんないって言ったけど、けっこう楽しそうだね」

「だろ？」

さっきつまんなさそうって桃香の顔が曇ってたのに今は楽しそう・・・もしかしてなんかたくらんでない？気のせいかな。

――――――それから約1時間。

思っていた通りの結果。

1位　田中雅人
2位　長谷川翔

３位　菱田悠介
４位　鈴村桃香
５位　関川心音

ははは っ笑っちゃうよ。桃香と２０もスコアが違う。下手すぎる・・・。

「じゃあ、くじ引くよ」

くじの紙に視線が集まる。

「２人で行くのは・・・・・・２位と５位！」

えっ５位は私。２位は・・・長谷川くんじゃん。

「とういうとこで・・・」

「ちょっと待って、桃香？」

桃香の腕を引っ張り、男子たちから離れる。

「心音！長谷川くんにちゃんと伝えなさい」

「やっぱり。分れて行動すること、初めから知ってたでしょ」

「内緒にしてたのはごめん。でも、ちゃんと言いなよ？」

「分かった。ありがとね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6762m/

恋色

2011年10月7日13時56分発行